

「研修会等名称」

第 24 回 FD フォーラム「大学におけるダイバーシティ」

場所：立命館大学衣笠キャンパス

期間：2019/3/2～3/3

1. 研修の内容

本FDフォーラムは1日目がシンポジウム、2日目が分科会とポスターセッションであった。シンポジウムは「社会人の『学び直し』と大学教育」「大学に集う人々の多様性」にいかに向き合うか」の2つに分かれており、後者のシンポジウムに参加した。

このシンポジウムには京都精華大学学長ウスビ・サコ氏、宝塚大学教授日高氏、立命館大学研究員松波氏、阿武山学園講師あかた氏の4名をシンポジストに迎え、それぞれの立場から「多様性」についての提言がなされた。

ウスビ・サコ氏はマリ共和国出身で、中国、日本に留学し、京都大学大学院博士課程を修了。京都精華大学、京都大学で教鞭をとり、現在は京都精華大学教授、学長である。自らの体験から、客観的に日本の大学における多様性の課題と意識改革の必要性について当事者の立場からの提言を述べた。

日高氏はLGBTについて15,000人規模の全国調査を実施し、特に思春期、青年期にあるLGBTの生きづらさについて丁寧な説明があった。彼らが思春期、青年期に直面する心理状況について貴重な資料を基にした説得力のある提言であった。

あかた氏は氏が所属する児童自立支援施設に関わる立場から、少数派と多数派について述べ、多数派が意識すべきこと、想像すべきこと、行動すべきことについて提言をされた。施設にいる子ども達の置かれている現状は結果であり、背景を想像することの重要性について述べた。

松波氏は障害のある学生に関して「障害者差別解消法」を提示し、古くからある「障害の医学モデル」（問題の解決の責任を障害を克服するのは本人と家族の責任であるとする）から、「障害の社会モデル」（問題解決は社会全体の責任であり、社会の在り方を問題とする）へと新しい考え方に移行するべきであると提言を示した。また、「合理的配慮」は「転ばぬ先の杖」ではなく、「対話」をしつつ問題を解決することが重要であると述べた。

2日目のポスターセッションでは、京都の大学における数々の試みについて紹介されていた。特に京都外国語大学、京都外国語短期大学による「学習記録手帳と振り返りによる自立学習支援システムの構築」、京都産業大学における「学生ファシリテータの経験から生まれたもの～社会人生活にどのように役立っているか」、京都府立大学による「地域特性（産業構造・地域ニーズ）を考慮した授業デザインと成果～京都と熊本それぞれの地域特性に合わせた授業とその成果～」立命館大学による「国際系ピアサポーターによる実践とコミュニティ形成：多様な学びの環境と繋がり構築に向けて」では、活動に関わった学生や教員から活動の意義や課題について詳細な説明を受けることができた。

2. 研修の成果

シンポジウムでは、マイノリティにある児童生徒、学生に長年携わってこられた方々から意義深い提言を受けることができた。あかた氏は児童自立支援施設にいる子ども達、弱い立場にある者、マイノリティの者たちが置かれている状況について「炭鉱のカナリア」に例えていたことが強く印象に残った。例えば「子どもの貧困」については社会で認知されるより前から現場では長年指摘されていたということだった。

マジョリティ側にいる者が置かれるであろう環境、受けるであろう状況に先に置かれるのが、弱者である彼らであるという説明は、現在日本に滞在する「外国につながる子どもたち」の状況と重なる部分が多い。

10年以上 LGBT の学生について研究を続けてこられた日高氏は、当初は研究内容について周囲の理解が得られずに公的機関の協力を得ることも困難であり、近年ようやく周囲の理解が広がりつつあると述べていた。しかし、一方で会場からは「理解が十分にはできない」というコメントもあったようで、社会的な認知と理解を得るにはエネルギーと時間が必要であることを痛感した。参加者には大学関係者が多いということを見ると驚きを禁じ得ないことではあるが、教育関係に携わる者として、弱者の存在を忘れずに、自らの問題として考え続ける必要があるのだと確認した思いである。

ポスター発表では、学生自身が自主的に運営や活動を行っているそれぞれの現場の声を直に聴くことができ、彼らの熱い思いが伝わり大変刺激を受けた。また、教員や学生だけではダイナミックな活動をすることは困難であり、いずれの活動も大学全体を巻き込んでおり、それにより有意義なプロジェクトになり得ることが確認できた。

3. 授業への研修成果の反映状況

留学生はマイノリティの立場にあると言えよう。特に豊橋キャンパスでは留学生の人数は多くはなく、日本人学生の認識も「留学生と話したことがない」「どの学生が留学生なのかよくわからない」という状況下にある。

留学生を対象とした授業では「多様性」について考え、話し合う機会があるが、日本人学生にこそ、この「多様性」について考え、「マジョリティにいる者がどう考えどう行動するか」について学んでほしいと考えている。今年度から担当する「多文化共生論」では「多様性」「マイノリティ、マジョリティ」について議論する場を設けたい。また、留学生と日本人との交流の場を積極的に設けたいと考えている。

留学生の中には LGBT の学生もいる。二重のマイノリティである場合について、教員も学びを深めたいと思う。

学部長	学習・教育支援センター委員長	学習・教育支援センター委員会	名古屋教務課長	係